

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370104855		
法人名	社会福祉法人 リデルライトホーム		
事業所名	グループホーム カムさあ		
所在地	熊本県熊本市龍田陳内3丁目37-7		
自己評価作成日	令和元年11月1日	評価結果市町村受理日	令和2年2月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和元年12月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は社会福祉法人リデルライトホームが運営している。カムさあは、小高い山の上であり、新興住宅地でありながらも自然も豊かにあり居住場所としてはより良い環境である。室内は全てバリアフリーになっており、洋室9室の1ユニットで運営している。基本運営理念として「その人らしく」「自己決定」「自己実現」「だれからも拘束されない」などを掲げ、その方らしく生きることのできる施設運営に取り組んでいる。我が家のようにくつろげ、最後までその人らしく生きることを支援しながらも、ご家族の絆を大切にすることをケア理念にしています。ご本人のペースで自分らしく暮らしていただけるよう、主治医と連携を図りながら、ご希望があれば看取り介護の実践にも取り組んでいます。併設施設に児童の放課後等デイサービスがあり、知的しょうがい者の施設に昼食を委託している。入居者も支援される一方ではなく、児童を見守り支援する側の役割も持ってもらうことで世代間での支え合いが可能となる。どのような障がいがあっても住み慣れた地域で最後まで尊厳のある暮らしができるよう支援して参ります。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人の理念を継承し、地域密着型事業所としてのホームの社会的役割を実践しながら運営を続けている。平成28年にスタートした学童の放課後等のデイサービスや、障がい者の就労支援事業として活動を続ける宅食サービス事業所と共に、同じ館内に集い、総合生活支援センターとして共生への道を歩いている。本年度は「抱え上げない介護」を推奨する法人と共に1年をかけて移動用リフトの導入に踏み切り、職員の負担軽減と介護業界全体のイメージアップに力を注いでいる。ホームでは入居者一人ひとりが出来ることで運営に関わり、台所のワゴンを利用した手押し車を自慢のマイカーとして移動手段に使用し、郷土食(一文字のぐるぐる)作りや、洗米、食器洗いなどの台所仕事に腕を振るい、得意な縫物でデイサービスのおもちゃを修理されるなど、個々の役割として力が発揮されている。地域の手厚い後押しに支えられ、今後の運営にもますます期待がもたれるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は、職員が日々の業務の中で目にするよう掲示している。入居者の多様な暮らし方や自立支援を理解し、自己決定のできる支援を目指し実践している。新採用職員にも、事業所の特性が理解できるよう職員研修で学びを深めている。	開設以来、ホームが発信してきた取組が地域の中にしっかりと根を下ろし、様々な場面で人々からの応援を受けて活動している。老若男女、子どもから高齢者まで障がいがあっても同じ屋根の下に集い、互いを労り尊重し、向上しようとする体制は、理念そのものとして広く地域に浸透している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議や行事などを通じて、地域の方と入居者の交流は実践している。地域のお店や配達を利用し、災害時は、地域を支援できるよう、校区社協とも連携を図りながら安心して暮らせる支援をしている	春の地域行事である地元公園での花見には、人々と桜を愛でながら、地域の新1年生の門出を祝い、一体となって参加している。運営推進会議に来所する地域代表者とは、顔なじみの関係となり、ホーム行事を共に楽しむ関係性ができている。また、12月にはライオンズクラブが企画する“餅つき会”がホームを拠点として盛大に行われ、地域に100食分のカレーを準備して参加者に配布するなど、地域での役割を担い活動している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入居期間の長い入居者については、運営推進会議や行事などを通じて、地域の自治会長さん・民生委員さんも名前を憶えてもらい、地域主催のお祭りなどに参加しても暖かく迎え入れてくれる。今後も地域の中で自分らしく暮らし続ける支援を実践する	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、サービスの実践や新しい取組などをパワーポイントを使用し報告をしている。また、熊本地震の教訓を活かした、防災の話や消防訓練へも意見をもらい運営に反映させている	包括センター職員や地域の代表者、家族の協力により定期開催が実現しており、2ヶ月毎のホームの現状を包み隠さず何でも話すとの姿勢で臨んでいる。長年、ホームを支える入居者も推進委員として同席している。パワーポイントを使って日頃の入居者の暮らしぶりを紹介しながら、法人栄養士による食への取組なども伝えている。会議の中で「身体拘束適正化委員会」を設け、ホームの方針を明らかにして現状を伝え、参加できなかった家族へは議事録を掲示して報告としている。	家族が集まる機会などには、会議内容を口頭で伝えることで、より分かりやすく意見等も引き出しやすいと思われる。取組に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議開催の際、地域包括支援センターの職員に参加していただくと共に、運営に関することは、熊本市役所の担当者を確認するなど、気軽に相談にのっていただける。又、介護サービス支援員の方に月1回来て頂き、サービス向上に努めている	運営推進会議のメンバーとして包括職員が参加することで互いの情報を共有し、ホームの取組みに意見や提案をもらいながら、良好な関係を継続している。管理者は書類提出や質問ごとがあれば直接役所を訪れ、担当者とは話しながらホーム運営に反映させている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については、定期的な内部研修会や外部研修会に参加して、身体拘束をしないケアの実践を行っている。また、法人全体で委員会を設置して法人全体で情報を共有している	身体拘束についてホームの姿勢を「指針」に明確にし、一切の拘束をおこなわない事を前提としたケアが実践されている。法人での全体研修をさらに共通認識の機会とし、当日参加できなかった職員にはレポートの提出により共有している。職員は「虐待の芽チェックリスト」による自己評価で、自身の日頃のケアの振り返りとし、集計結果を今後の支援に反映させるように努めている。ホームでは個別の服薬支援に担当医師と連携し、安定剤や入眠剤に頼らない支援にも取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待については、先日も内部研修を実施しましたが、個人レベルの課題・法人レベルの課題・地域レベルの課題に分類して法人全体で情報を共有し委員会活動の実践をしている。不適切ケア職員アンケートなどで虐待防止の徹底に努めている		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入居の段階で権利擁護について説明している。年に1回は外部研修で学びの機会を設け、必要時は制度の活用ができるよう学びを深めている		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時の契約時は、ご本人やご家族が安心して入居できるよう十分に時間をとり説明を行っている。制度変更により、契約内容や重要事項内容に変更がある場合は、必ず説明を行い契約書もしくは、変更合意書を取り直している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者やご家族の意見は日常生活の中で改善できるように、迅速に対応できるようにしている。共有認識を深めるため、ケア会議や職員会議を活用している	入居者の中には開設当初からの方もおられ、その都度意見や要望を聞きながら、長いホーム生活を支えている。入居間もない方へは安心して意見を言い出せる環境を整えながら、家族からの要望と合わせ、対応するように心がけている。家族がホーム行事や面会に訪れる機会は多く、中には毎日顔を見に訪れる家族もおられ、来所時には入居者の近況を伝えながら、遠慮なく意見をもらうよう投げかけている。	家族の面会は多く意見や要望を引き出す機会となっているが、今後は職員間で内容を検討したアンケートの実施も検討の余地があると思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者と共に運営に関する会議を月に1回設けているが、週1回は代表者と直接、入居者の体調やご家族の意見などを細かく話ができる時間を設けてもらっている。指示にて運営に反映するような仕組みが確立されている	管理者が法人の運営会議や管理会議に参加し、職員の処遇改善や事業所の環境整備、レベル向上に向けた研修の機会などについて、代表者を交えて検討している。本年度は法人をあげて介護のイメージアップに努め、導入に1年を費やした移動用リフトは、職員の負担軽減につながり、何より入居者自身に無理のない体制での移動が可能になっている。代表者は機会があればホームを訪れ、入居者と会話を交わし、職員意見を運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	月に1～2回の運営会議では、各事業所の管理者・リーダーが集まり、職員さんのやりがいや・職場環境改善について話し合い、月に1～2回管理会議で代表者を含め運営に関する事や労働環境・給与について話し合う機会を確立している		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員さんは、事業所の柱であるため、学の機会を確立している。施設内研修・事業所研修・施設外研修など、それぞれのキャリアのあった学びの機会を確立し、キャリアアップを法人全体で支援している		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス連絡会や龍田校区介護事業所連絡会等に所属し、職員が気軽に研修会や同職種の交流に参加できるように取組み、サービスの質の向上を目指している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居初期はできるだけ安心して過ごしていただけるよう話しやすい環境をつくり、できるだけ傍で話が聞けるようにしている。ご本人の意見を尊重し、安住の場となるようこれからも努力していく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	安心してご家族をご入居いただけるよう、不安や要望等を気軽に意見を出せる、より良い関係の構築に努力している。また、ご家族の話にも耳を傾け、その方らしい生き方ができるよう今後も務める。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	その方らしく生活していただけるよう、必要とされる支援は、他サービス利用も含め、必要とされる支援に優先順位をつけながら、実施できるように努力している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の個性や持ち得る力を発揮できるような関わり方を常に行っている。共に過ごすことで信頼関係を構築し、それぞれが生活の中に役割をもつことができる関係づくりを心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人にとって家族は大切な方であることを職員は理解している。面会時は、ゆっくり過ごしていただけるよう日頃よりご家族の絆を大切にできるよう心掛けている。また、近況をご報告し、ご要望を聞きながら共に支える関係を努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者がこれまでに築き上げた関係性が立ちきれないように支援をしている。 例)美容室・病院・外泊支援・外出支援など	ホームは家族とのつながりを特に大切にしており、面会時にはリビングや居室で入居者との時間をゆっくりと過ごしてもらうよう声を掛けている。館内に併設する放課後等のデイサービスに通う子ども達との交流は、普段の関わりや合同行事を通じて、無くてはならない存在となり、世代間交流が相乗効果をもたらし、入居者の生活の励みとなっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者は支援される一方ではなく、相互に支え合える関係性を事業の柱にしている。入居後も生きがいを見出し、自分らしく暮らすことのできる支援の実践に努めている		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	出会えたご縁を大切にご本人やご家族の相談内容に耳を傾け、出来ることを職員で考える姿勢を継続している。サービスが終了しても、行事への案内や相談なども支援している		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の希望や意向読み取れる内容を見逃さず、職員間で共有でき、希望に沿った生活が送れるようケアの実践を行う。また、ご本人の意向が確認できない場合は、ご家族と相談しながら生活の在り方を検討し、より良き暮らし方を探究する。	職員は入居者との日々のかかわりの中から、暮らし方の希望や思いを引き出し、ベッド中心の生活になられても、散髪をしたいとの希望に訪問理容を検討したり、体調を見てリビングで他者との時間を過ごしてもらうなど、本人の意向を優先したケアに努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活内容に大きな変化が無い暮らし方を基本にしたいが、生活基盤が変更になるため、馴染みの暮らし方が実現できるよう、各職員が収集した情報が活かせるよう支援に努めたい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録表を24時間表を活用することで、食事・睡眠・排泄・余暇の過ごし方・リハビリ等を時間を軸にして記録するようにしている。3ヵ月毎にモニタリングを実施することで、現状の把握に努めるチームケアを実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	生活する上でご本人の意見を聞き、より良い生活が営めるよう、課題解決に向けたカンファレンスやご家族の意向を踏まえた介護計画の変更や実践を行っている	職員はプラン作成にあたり、高齢化や重度化に対応して3ヶ月毎にアセスメントの取り直しをおこない、状態の変化にいち早く対応できるようにしている。家族の通院から訪問診療への切り替えの希望や、体幹の傾きなどの医療支援には担当医師との連携を図り、病状の悪化防止と体力・筋力維持をあげている。職員会議とは別にケア会議の時間を設けており、職員の気づきや提案が入居者の現状に即したものとなるよう努力している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録用紙については24時間表を用い、個々の生活スタイルや身体状況に適した、記録用紙になっている。気づきや変化を情報の共有でき、日々のケアに反映できるよう実践に活かせるよう努力している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族に必要なニーズについては、柔軟に対応できるように、全職員が心がけ多方面から検討するようにしている。また、幅広い支援がご本人にとってより良いと考えている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ご本人の力を引き出す生活の方や安全・健康を優先する方等、心身の状況により違いはあるが、地域に開かれた施設運営を行い、地域の方に入居していただけるよう、今後も地域に貢献してゆきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	個々の主治医との連携を密にすることで、安心して医療が受けられる支援を行っている。また、病院受診ご家族と共に職員が付添いの確かな情報提供及び情報の共有ができることで適正な医療が受けられるよう今後も支援する。	かかりつけ医については、本人・家族の希望を重視し、往診や受診を支援している。往診時に家族の都合がつけば、一緒に聞いてもらい現状を共有してもらっている。また、医療機関への受診には、家族とともに職員も同行し、情報提供を行うことで、適切な医療につなげている。入居者の現状から看護職員と介護職員、ホームと主治医との連携は特に重要であり、些細なことでも気になることは共有を怠らず、業務にあたっている。	管理者は病状や病気の告知は、信頼関係のある医療機関、医師から受けたいと思うのが当然であり、これまでのかかりつけ医を継続することの重要性を語っている。今後も入居者の日常を個々のかかりつけ医とともに支えていかれることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護体制は専任の看護師を配置している。介護職員と同じ日々の関わりをしてもらっていることから、職員の信頼も高く、早期の気づきであっても随時、相談できるような体制が図れている。また、24時間体制で連携が図れるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された場合は、出来るだけお見舞いに行き、入院中の状態も把握できるように心がけている。このことにより、早期退院がスムーズにできるように職員全員で協力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期については、ご家族のご意向を十分に聞き、緊急時の対応や主治医との連携を図れるように、細心の注意を図りながらチームで支えることができる体制を設けている。	重度化・終末期支援に関する指針をもとに、看取りに関するイメージをチャートをして説明をおこなっている。指針の内容は、太めの字で記入されている。看取り支援は職員のメンタル面へのサポートも重要であり、管理者は看取りを心配する職員へ無理をする必要はないことを伝えている。今後も日頃の関わりを大切に、ホームにできうる支援に努めていきたいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応は研修会等で勉強できるようにしていると共にマニュアルを作成もしている。しかしながら、職員が緊急時となった場合の実践力に不安を抱えている。そのため、今後も勉強会を含めた学ぶ場を多く設け、不安除去に努めたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回に消防訓練を地域の自治会や地域消防団と連携しながら実施している。また、防火意識を全職員で持ち、定期自己点検や、屋外の可燃ごみの放置などがないように放火対策にも注意している。法人内で3ヶ月1回防災対策委員会を開催。予期せぬ災害に適正に対応できるよう日頃より備蓄や物資の備えなども委員会と共有している。	年2回、自治会や地域消防団と連携しながら消防訓練を実施している。火災と合わせ、昨今の自然災害のもたらす被害は、想像を超えるものである。管理者は災害について考えることができる職員の育成を進めており、法人内で開催される防災委員会への参加や、日頃からホーム内外の安全管理に努めている。また、地域の有事の際は、ホームを避難場所として活用できるよう今後も、体制を強化していきたいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者一人ひとりの生活リズムを尊重し、自分らしく暮らせる支援をしている。また、不適切ケアへの対応も法人を含め学習の機会を設けるなど、職員さんが働きやすい環境整備にも努めている	理念に掲げた「愛と奉仕の精神」を職員は常に念頭に置き、一人ひとりの尊厳を大切にした支援に取り組んでいる。言葉使いや不適切ケアを含めた法人研修会への参加や、気になる点があれば全員で振り返りの機会をもっている。また、身だしなみやおしゃれも尊厳につながるものであり、特に盆・正月前のカットや髪染めなど大切にしてきた習慣などを継続して支援している。訪問当日も、新年も近くなり、好みの色の白髪染めが準備されている居室も見られた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の気持ちを表すことができるようにケアの在り方を、表情・言葉に耳に傾けるようにしている。職員が押し付けるのではなく、ご本人が実践できるようなケアに努めたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	心身を安定した状況に保つためにできるだけ規則正しい生活が送れるように支援している。食事時間などは決まっているがそれ以外は出来るだけその方のペースで柔軟に対応するようにしているがケアは合理化できないので全て行っている訳ではない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節ごとにご家族にご協力いただき、おしゃれできるように支援している。また、入居者の理美容や入浴後のスキンケアにも気を配っている。その人らしさの一つに身だしなみがあると考えている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事はご自分で食べるのが一番であると考え、時間がかかっても出来るだけ自分で食べることのできる工夫をしている。また、楽しみの時間であることを職員は理解し、個々の能力に合わせた役割を担っていただけるようお声かけをし、正しい姿勢で食事をしていただくよう支援している。	現在は、朝食の味噌汁のみをホームで準備し、他は隣接する支援センターで作られた料理を提供している。食形態も常食や刻み、ミキサー食、ソフト食、ソフト個食の5つを準備しており、見守りや必要な介助が行われている。また、姿勢を変えるだけで食事の目線も変わっていくことを共有し、日々の食事支援にあたっている、入居者は野菜の収穫やつぎ分けをはじめ、味の評価を発してもらうなど、楽しみながら食への関わりが持てるようにしている。	運営推進会議の中では、入居者が洗い物や一文字のぐるぐるを作られる様子、食形態、姿勢で料理の見え方が変わることも写真をつけて説明が行われている。また、支援センターとの連携が図られ、季節感のある美味しい食事が提供されており、今後も継続した取組に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食生活は、身体づくりの基本になるため、過度なカロリー摂取を避け、栄養のバランスを考慮した食事の提供を行っている。飲み物は、数種類用意し、一日1500ml摂取を目標に支援している。内容については記録に残し継続的支援ができるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、必ず個々の能力に合わせた口腔ケアを実施し、異常の早期発見に努めている。重度化に伴い、ガーゼを手に巻き口腔ケアをおこなうようにしている。口腔内の確認を行い、トラブルがあった場合は歯科につなげている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	できるだけトイレで排泄できるよう支援している。重度化に伴い1人で移乗させれない場合は、2名で対応するようにしている。トイレで排泄できることが、尊厳の保持に繋がると考えている。	尿取りパットを使い分けながら現在は、殆どの方がリハビリパンツを使用されているが、夜間のみテープ式オムツや布パンツで過ごされる方も1名ずつおられる。基本的にトイレでの排泄を支援しており、職員は気持ちよく使用できるよう清潔に管理している。面会を兼ね家族が排泄用品を購入される場合は、迷われることの無いよう、商品名やサイズがわかるカードを用意するなど、職員のアイデアが生かされている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	高齢になると運動量が減り便秘になりやすくなるそのことを職員は理解した上で、食物繊維を多く含んだ食事や乳製品・水分を多く摂取していただけるように努力している。それでも改善できない方は、定期的の下剤を使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴回数は週2～3回以上としている。入浴がお好きな方は入浴回数を増やして対応している。また、安全確保の観点から職員が2名で対応する入居者の場合、ご本人の希望通りに入浴することは難しい。そのため、曜日を決めて対応している。職員と会話を楽しみながらの入浴や入浴剤の活用等で入浴を楽しんでいただける工夫をしている。	入浴は週2～3回の支援を行っており、現在は半数の方がリフト浴を使用されている。回数は希望に応じて対応しており、拒否のある方には、曜日を固定すると安心されるなど、職員は普段の関わりからより良い支援方法を見出している。入浴は職員との会話を楽しむ時間でもあり、入浴剤の使用や12月には毎年、近隣者から柚子が届けられ、季節湯に活用されている。また、柚子の差し入れは、その方の安否を知る機会にも繋がり、近隣者との日頃の関りが窺える。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体力に配慮し、休息のタイミングを調整している。できるだけ、日中活動を増やし昼夜逆転にならない程度のお昼寝を取り入れ疲労回復に努めている。寝具を天日干しし、できるだけ快適な睡眠になるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が薬の内容を把握するため、個々の薬事情報をファイルし、どのような薬を飲まれているか理解できる仕組みをつくっている。また、誤薬のないよう職員で話し合い全員で取り組んでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	全員で外出することは数年前より行っていないが、個々の性格を理解し、役割や楽しみごとの支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	日常生活の中で社会とつながり、充実した人生を送っていただきたいと職員は理解している。ご家族と協力して外出することもあれば、ご家族が支援してくださる場合もある。地域行事にも参加することもあり、社会とつながり続ける支援をしている。今後も屋外へ外出することができるよう支援する。	住宅街の中にもありながらも豊かな自然を感じながら過ごせる環境にあり、入居者の状況に合わせて敷地内の散歩や地域の花見会への参加などに出かけている。10月に復興中のお城見学に出かけた際は、テレビで現状は見ていたもの実際に訪れ、大変喜ばれたようである。見学後は外食(回転ずし)を楽しみ帰園されている。家族も可能な限り外出の機会を支援しており、受診や外食をはじめ、年末・年始の帰省、外泊を予定されている方もおられる。	重度化の現状にあり、ドライブや全員での外出は困難になっているが、敷地内の散歩やウッドデッキでブドウの成長を見ながらの外気浴なども楽しまれている。また、子ども達との交流も楽しみとなっており、今後もホームや法人の特性を生かし、入居者の外出や外気に触れる機会を継続して支援されることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理は個々の能力とご家族との話し合いで支援している。ご家族の協力が不可欠で、外出した際は、お金が使えるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	職員は、ご家族や大切な方に対する入居者の気持ちを理解した上で、電話や手紙でのやりとりが出来る支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地の良い空間づくりを心掛けており、室温・湿度にも気を配っている。リビングには音楽をかけ心地よい環境にしている。また、玄関やリビングには季節のお花を活け季節感を感じれるようにしている。	紅葉などの樹木やミニ菜園のある中庭を眺められるリビング食堂で、入居者は日向ぼっこや家族との面会、手足のマッサージを受けるなど穏やかな時間を過ごされている。家族から差し入れされた花のアレンジや職員がセレクトした季節の置物、入居者の作品や写真(外出やイベント、日中の様子)の掲示など、それぞれの場所にふさわしい工夫がなされている。リビングには開設時からテレビは設置されておらず、入居者同士の会話や一人でソファに寛いだり、職員とのコミュニケーションがいつもの光景となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにはタイプの違う椅子を用意し、雰囲気を変えくつろげる空間や入居者が思い思いに過ごすことのできる居場所づくりを心がけている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人の馴染みの家具を持ち込んでもらい、落ち着ける居室づくりに取り組んでいる。物の配置はご家族と相談した上で決めている。個人のプライバシーが保たれる居室になるよう今後も努力してゆきたい。	入居時の馴染みの家具や小物などの持ち込みとその後も状況に応じた居室作りを家族と一緒にやっている。移動用リフトの導入に備えスッキリとした部屋もあるが、家族の写真、大好きな花や犬が表紙を飾るカレンダーの掲示、使い慣れた化粧品など、どの部屋も本人の好みや家族の思いが伝わってくる。臥床が中心になられた方にも、新聞に掲載された家族の受賞の切り抜きの掲示を指して、やさしく声をかける職員や入居者の表情から、ホームの日常が伝わってきた。	使用しない間の靴は、ビニール袋に入れて保管されている光景や、その時の入居者の状況に応じたベットや物品の配置など、細かな対応が聞き取りや現状からも確認された。継続した取組に期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々の力を理解し、わかる工夫やできる工夫をしている。わかる工夫として、日めくりカレンダーやタンスへの表記の実施。できる工夫として、手すりを整備しバリアフリーにすることで建物内を自由に過ごすことができるように工夫している。		